

-プロローグ-

僕がビジネスの世界に入って、3年と半年の月日がたった。

この3年半で僕の生活は大きく変わった。

食べたいものは食べたいだけ
食べれる生活になったし

欲しいものは何でも買えるようになった。

ふと朝起きて、
旅行へ行きたいなと思ったら
新幹線のチケットと宿をすぐにExpediaで予約して
泊まりたい旅館に
ほぼ値段を見ずに泊まるし

僕は温泉が好きなのだけど
泊まりたい温泉旅館は

最近はInstagramのrelux_ryokan
というアカウントのReluxが運営している
Instagramの画像
を保存するようにして
気分が向いたら行ったりする。

まあそれはいいとして。

こんな生活は3年半前の僕なら、
到底考えられなかった。

3年半前の僕は誰がどうみても
社会不適合者そのものだった。

親からも友人からも全く信用されない。

もちろん僕にも僕なりの葛藤が
当時は自分の中でいろいろあったし

その時から何も考えていなかったか
と言われればそうではないんだけど

ただ、見かけ上は
社会不適合者そのものだった。

偏差値70ある進学校を卒業後は、
河合塾で1年間浪人をし

全く勉強をしなかったので
偏差値1も上がらず

結局、現役時でも入れたであろう
都内の私立大学へ入学。

大学時代はやる気が全く出ず、
毎日とりあえず家を出ては
図書館や服屋へ行き、
趣味の洋服を見る毎日で
大学はサボついていた。

それもあり大学は留年し、
その翌年も同じような生活を送っていたので
また留年をした。

両親との関係は破滅状態になり、
信用できる友達も全くいなかった。

毎日がただ悶々としていて、
めっちゃくちゃ退屈で、
仕方がなかった。

その後の僕にどんな人生、
そして変革があったというのか。

今だから話せる。
僕の身にこの3年半で実際に起きたこと。

仲間の裏切り。
1000万単位の詐欺。

ビジネスパートナーに裏切られ
500万円もの借金の押し付け。

友人は全員いなくなり
拳銃の果てには警察から逮捕される。

コンビニアルバイトで1日20時間働く日々。

一見輝かしい成功の裏には
様々な壁、そして数々の落とし穴があった。

成功の裏の

光、そして闇

僕のこの3年半の回想をしていこう。

と、その前に
まずは僕の幼少期から
ビジネスを始める
23歳までの23年間の話をしていく。

※3年半の回想をすぐに読みたい方は
41ページ目からお読みください。

今この段階で、
僕は今までの半生をしっかりと振り返ることで、
僕の今後の人生の道筋が
今よりももっと、
明確にみえてくると思うからだ。

生まれてからビジネスを始めるまでの23年間、

僕はとにかく
毎日が退屈で退屈で仕方がなかった。

もちろん要所要所で楽しかった思い出はたくさんある。

けど、
全体を通しての印象と言え
とにかく毎日が退屈すぎて仕方がなかった
というそんな印象。

毎日窮屈で、退屈で
いたたまれない閉塞感に悩まされていた。

そんな僕は、幼少のころから
圧倒的な自由を求めている。

まるでアルプスの大地という
イメージが伝わるだろうか。

空気が澄んでいて、
自然がたくさんで、雲一つない青空。

高い建物が全くなく
都会の喧騒のような閉塞感が全くない。

そこは大高原が広がる。

実際、自給自足というと
大変なことはたくさんあるだろうが

アルプスの少女ハイジのような
そんな世界観に強い憧れを抱いていた。

どちらかというと
幼少期は
精神的な自由と身体的な自由をとにかく追い求めていた。

ただ実際は退屈で、
僕が求める自由とは全くもってかけ離れた生活。

心の中がいつも、
どんよりとした雲で深く覆いかぶさっている
そんな感覚だった。

小学生時代。

僕は毎日ごとにかく退屈で仕方がなかった。

僕の両親の教育方法が正しかったのかはわからないが、
僕が不満だったのは
僕の家庭はゲームをほぼ買ってもらえなかったこと。

ゲームボーイまでは買ってくれたんだけど
僕の世代なら一家に一台は必ず持っているであろう
ゲームキューブが僕の家にはなかったし
お願いをしても、買ってもらうことができなかった。

僕が生まれたのは1992年。
平成4年だ。
その世代なら当たり前持っているであろう
ゲームキューブというものが僕の家にはなかった。

だから、
僕は小学校低学年の頃から

みんなが当たり前にできる
スマッシュブラザーズやマリオカート、星のカービィ
といったゲームのルールが全然わからなくて

とりあえず友達の家に行ったらやるけど
なんだか難しくてわからないし、
自分はやりなれていなかったなので鬼弱かった。

いつやっても負けるし、
そもそもルールがわからなかったから
果てしなくつまらなかった。

けど僕らの世代の子供は
遊びは何をやるか？
といえば大抵がゲームだ。

だから友達が全くいなかったか
といわれれば
そうではなかったんだけど

友達はかなりできにくかったし、

ゲームの話はついていけないしで
だからどことなく
退屈な毎日というか
閉塞感を感じる日々を過ごしていた。

そんな感じで小学校低学年から
中学年を過ごして

小学校5年の時に
僕は親の転勤とマイホームを建てること
がきっかけで転校することとなる。

今の実家は、その時に建てたもので
そこから家を出る23歳までの間を、僕はその街で過ごした。
(東京都の23区外である)

余談だが、小学校時代の特技は
足の速さと勉強をあまりせずともできることだった。

次に中学校時代。

中学の頃の僕は、
とことん中途半端な男だったと自分でも思う。

部活は中学では珍しいかもしれないが
硬式のテニス部へ入り
受験期に入る中学2年の終わりまでは
硬式テニス部へ在籍していた。

そんな僕は、
単なる憧れから
中学校1年生の頃から
頭のいい、いわゆる偏差値の高い高校へと
進学がしたかった。

だから勉強しようとしてはいたんだけど
どうしても勉強嫌いなものもあり

普段、自宅学習といったものは全くしていなくて
それでも学校の勉強は簡単だったから、
まあまあできていた。

本音を言えば
全科目100点を取り、学年1位になって

あいつは頭がいい。
みんなに頭がいいと注目を浴びたかった。

ただ毎度のこと
いつの間にかテスト前になってしまし
テスト3週間前から勉強して
学年1位とって、みんなを見返してやるぞ！！

そう思うんだけど、
いざ勉強机に向かうと寝てしまったりで
親も定期的に
僕の部屋をチェックしては
寝ている僕を怒鳴り散らし
その反動でまた寝てしまうという(笑)

で、いつの間にかテスト2日前ぐらいになって
焦り、本気を出し始める。

テスト1日前が一番本気で

徹夜して勉強するが
結局テスト本番に間に合わず
全科目80点台という消化不良に終わる。

学校の成績は学年では毎回20位ぐらいだった。

それが自分の中で恥ずかしすぎて、
自分はやれば本当はもっとできるのに！！
そう心の中で思い込んでいて

人には絶対テストの点数の結果を教えない。

そんな中学生だった。

そのころの僕は、
できない自分と一切向き合うことをしない
完璧主義的なスタイルで

勉強する時も
効率を重視することはせず

捨てることを知らず
テストにここは絶対出るとか
そういう発言は気にも留めたことがなく

だからといって、机の前で寝てしまう自分への
具体的な対応策をとったことはなく、
全く戦略的でないのにできる
と思い込んでいる
ただの勘違い野郎だった。

ただ、授業中はやはり誰よりも早くできたりするから
自分はできるという謎の自信があった。

結局、3年間にわたり、
実際のテストでは周囲の人間を凌駕するような点数を
取った試しが一度もなかった。

つまり実績0である。

この頃の完璧主義的な
全く自分を客観視できていなかった頃の経験は

今振り返ってみると、非常に大きく学べることがある。

今もなお、

僕は自分のポテンシャルには期待をしている。

ただ、実績はまだまだだから

もっと上を目指していかなきゃなどは常に思う。

そして、今やるべきことにとことんフォーカスし

それだけを集めてやりこむ。

それは不必要なことを捨て、

必要なことだけに絞って、やりこむということである。

そして自分の強み、弱みというものを知って

そのうえで戦略的に事を進めていく。

ただ何より今は

やりたいことをとことんやっていきたい

という素直な気持ちが非常に大きい。

これも、周囲からの評価だとか

周囲が期待している自分の姿というやっかみを

とことん捨てて、
今自分は何をやるべきか。
何をやらないべきか。

そして近い将来、自分は何をやりたいのか。
どういう人生なら、
自分は満足でき、幸せになれるのか。

という
とことん自分の理想像を追求した生き方を
することを意識して、生活している。
これは一種の捨てであり、選択と集中。

ちなみに中学の頃の僕は
勉強こそまあまあできたものの
生活態度は最悪だった。

特にやりたくない科目の
家庭科や技術、情報、音楽など
5科目以外の教科は徹底的にサボりつくしていた。

なので、通知表の評価は
5科目は4か5なのに対して
5科目以外は体育を除けば、普通に2というものが多かった。

学校は毎日のように遅刻していて
だから内申点は鬼のように悪かった。

そのころから
僕は周囲とあわせるというのが
非常に苦手で

別にそういう自分をだめだなんて一切思っていなかったし

先生に反抗するとかそういう気持ちは
全く持ってなかったんだけど

縛られた生活というものが凄く嫌いで
どうしても学校の規則をしっかりと守る
ということができなかった。

なので高校は、内申点が関係しない

私立の高校へと行くことにした。

ちなみに僕は
受験時も全然勉強することができなくて
勉強をしようという意思こそあるものの
机に向かっては、毎日のように寝てしまっていた。

そしていつの間にか受験前になり
一応偏差値70の
都立のトップ校を落ちた人が
滑り止めでいく学校へ
半ば奇跡的な合格を果たす。
(受験科目が国数英のみで、それは割とよくできたのが理由)

僕は高校こそ、しっかり3年間勉強をし
東京大学へ行って、周囲を見返してやるぞ！！
そう心の中で強く意気込んでいた。

そして高校時代。

この話は僕の過去のコンプレックスの塊のようなもので
非常に話したくはないし、
実際周囲の人にも、僕は隠して生きてきた。
今の僕の見ただ目からすると
そんなことは想像がつかないし
周囲も気づかないし
なにより僕のプライドが許さなかった。

ただこの話を抜きにして、
僕の半生を語ることはできない。

今、勇気をもって、この事実を語ることにする。

僕は高校に入学してからの1年間。

いじめを受けた。
非常に辛い1年間だった。

実際に殴られるとか、
画鋸が上履きに入っているとか
テレビに出るような悲惨ないじめを受けたわけではない。

どちらかというと、ハブにされる
とかそういういじめだ。

とにかく毎日
学校へ行くのが辛くて、
家に帰っては毎日のように泣いていた。

悔しかった。
切なかった。

僕は高校こそはリア充してやるぞ！
と意気込んでいた。

文武両道。
勉強もしっかりできて
部活もしっかりやって
そして可愛い彼女をGETしてやる。

そう強く思っていた。

高校へ入学してから
僕は中学の頃にやっていた
硬式のテニス部へとそのまま続けて入ることにした。

テニスも、高校へ入ったら本気で練習して
都大会に出場してやるぜ！！

そう意気込んでいて、
とにかく高校生活が楽しみだった。

入学して1ヶ月ぐらいたったある日のことである。

急に部活のメンバーの
僕に対する態度が変わった。

みんな揃えて、僕と口を聞いてくれなくなった。

1人かなり仲良かった子も
僕をあからさまに避けるようにしていたのがわかった。

はっきりとした原因は
正直今もわからない。

ただ僕は、
当時から非常に素直で正直だったし
人に対する物言いも正直に言うことが多かった。
なのでもしかしたら、
はっきりとした物言いが原因で、
誰かの傷つくことを気づかずに
言ってしまっていたのかもしれない。

それが原因となり、
あいつハブこうぜ。となったのかもしれない。

ただ、直接に理由を言われたわけでもないから
そのはっきりとした真相は、今もわからない。

2か月後も3か月後も
この状況が変わることは、一切なかった。

部活ではあからさまに
僕とペアで練習するのを皆嫌がるし

僕は部活へ行くことが辛くなってしまって
結局、退部することとした。

この高校は中高一貫の学校で
高入生は比率で言うと、学年の4割程度だ。

そして、たまたま硬式テニス部が
イケイケというか
影響力のあるメンバーが揃っていた。

なので僕の悪い噂が
一貫生のほぼ全員と
高入生の一部の影響力のある学生の間で
またたく間に、広まった。

あいつとは絡むなど。

皆、僕を見かけると
あからさまに僕を避けようとするのだ。
実際にどれくらいの人に
僕の悪い噂が広まり、
どれくらいの人が僕を避けていたのかはわからない。

けど、当時の僕にとっては
学年のほぼ全員が
敵に見えて仕方がなかった。

僕は自尊心とプライドが高かったのもあり
誰にもこの悩みを話すことができず

学校から家へ帰っては
僕は毎日のように自分の部屋で泣いていた。

悔しい…
悲しい…

なにより原因がわからないのが
一番つらかった。

入学してすぐできた
数人のテニス部の友達。

あの時の
これからいよいよ高校生活が始まるんだという
あの高揚する気持ちは一体なんだったというのか。

現状に納得がいかず
ただ悔しくて、毎日、泣いていた。

それが原因で、
学校では勉強どころではなくて
成績は赤点続きだった。

両親は中学の頃から内申点が悪く
仕方なく自分を
私立のお金がかかる進学校へと入れてあげたのに
成績があまりにも悪い僕に怒り狂っていた。

だからいじめの相談をしても
全く持って聞く耳を持ってはくれなかった。

あなたが悪い。
あなたに原因があると。

担任の先生からの僕の評価も
最悪だったから
先生にも全く持って相談できず、
僕は1人悩みを抱えていた。

言い訳と言われればそれまでだし
逃げと言われればそれまでだ。

ただそれが原因で
僕は勉強をする気が
全くもって起きなくなってしまうていた。

極めつけは
7月の七夕の日、
校門には
願いを自由にぶら下げることができる
短冊が飾ってあった。

僕はそういうのにあまり興味がなかったので、
くだらないなと思いつつながら
ボケーっと飾ってある短冊を1人眺めていた。

そこにあった短冊の一つに
「〇〇みさき(僕の本名)氏ね」

僕は驚愕した。
身震いがして、
そっとその身震いを誰にも気づかれないよう

僕はその場を後にした。

家に帰宅後、
僕は自分の部屋で号泣した。

「なんで…どうして…
なんで俺だけがこんな辛い目にあうんだよ。」

今は口を聞いてくれない
入学して早々仲良くなった友人だったあいつらも
周りのやつも
皆楽しく学校生活を送っているじゃないか。

「なんで俺だけこんな目に合うんだよ…」

僕は落胆した。

テニス部も退部し
徐々にいじめといういじめは、落ち着いてきた。

ただ、

僕を見ると避けるという行動自体は変わっていない。

そんな生活も
時間が経つと徐々に慣れてきて
他校のいわゆる普通の高校生活
を送っている学生達を見ては羨ましながら
そうこうしてる間に、気づけば1年という月日経っていた。

僕は高校2年生になった。

2年生になってから。

同じクラスになった
たまたま校内で権力のある男の子に
何があったかはわからないけど突然好かれ、
そこからは僕と口をあわさなかった人たちも
次第に口を聞いてくれるようになり
僕への偏見は徐々になくなっていった。

ただ、僕は空白の1年間を過ごしたし

僕には勉強はしないという
半ば習慣的なものがその1年でついてしまっていた。

だから2年生になっても
同じように墮落した生活を継続し
僕はテストは毎回赤点で、常に追試だった。

空白だった1年間で
何とか取り戻したくて
とにかく何か楽しいことがしたかったのだ。

ただ、学校は
まさに勉強だけに特化した
というような進学校で校則も厳しく、
そのためアルバイトも禁止だ。

だからお金もないし、外部と接触する機会もない。

他校の普通の高校生だったり、
付き合っていて仲良くしているカップルだったり
とかを見るとそれが楽しそうで、
とにかく羨ましくて仕方がなかった。

その後の僕は、
もういじめられるのがとにかく億劫だったのもあり
いじめられないキャラづくりを徹底していた。

とはいえ、別に強がる
とかそういうものでもなくて

ただ単に自分の主張は極力抑えて
周りが求める僕の理想像というものを
ひたすら作るように意識をしていた。

だから、あとの2年間も本来の自分の姿を
さらけ出すということは全くしなかったし
なので高校生活はとにかく退屈で

卒業後は、
高校時代に絡みのあった友人たちとも
自然と僕の方から連絡を取らなくなった。

普通の高校生が味わうであろう
好きな女の子と恋愛してお付き合いをするだとか
学校の帰り道に友達とゲーセンへ行くとかの経験は
僕の高校時代には皆無だった。

とはいえ部活に明け暮れたわけでも
勉強漬けの毎日を過ごしたわけでも
なんでもなかった。

そんな僕には
高校時代の青春というものが全くないに等しかった。

非常に退屈な、毎日を過ごしていた。

悶々とする日々を過ごし
いよいよ高校3年生になる。
3年生になってからも当然のように
全くもって、勉強する気は起きない。

今の僕に、以前の僕のような
東京大学へ行ってやるぜ！！
などという熱い感情はもはや全くなく

そもそも大学へ行く意味はあるのか？
とかそのような事を考えだしていた。

猛勉強する周囲の人たちについていけず
あっという間に1年がたち、
1年目はほぼ記念受験で
早慶、MARCHを受け
当然のごとく、全落ちをする。

そして河合塾での浪人生活が始まる。

ちなみに僕の浪人が決まったときは
ちょうど東日本大震災が起きた年で

勉強とは全く関係がないけど、
なんか大学へ行く意義があるのかよくわからず
悶々としている最中にそれが重なり

僕はなんだか病んでしまっていた。
完全に何に対してもやる気が出ず、
とりあえず家を出ては河合塾をサボるという毎日が続いた。

模試で全く成績が上がらない僕に対して
高校から私立の進学校へ入学させてもらい
学業のためにお金を費やしまくっていた

僕の両親は、
僕に常に怒り狂っていた。

怒り狂って、
大学受験時にかかったお金のことや
私立の3年間でかかった学費、
浪人の河合塾代は馬鹿にならないなど

確かにそうかもしれないが、お金の話しかしないのだ。

ただ、当時の僕には正直あまり
実感が湧かなかつたし
僕はそれを見るたびに
余計に受験に対するやる気が消え失せていった。

なにより1番の理解者である必要がある両親が
僕の高校時代のいじめを
全く持って蔑ろにしていたこと。

それが僕の中で一番の
受験や勉強に対してのやる気が消え失せてしまった
要因ではないか。

そう思っているし、実際にそうだったと思う。

そうこうしてる間に、1年の月日がたつ。

僕はとても暗い雰囲気だったので
浪人時代も友達が一切できず
何一つとして楽しいことがなくて

結局大学は
現役時でも受かるような大学に
進学することにはなったものの
いよいよ新生活が始まると思うと
少し楽しくなってきた自分もいた。

しかしイメージとは裏腹に
大学は僕にとっては
とんでもないぐらいにつまらない場所であった。

僕はすぐに行かなくなった。

当時の僕は
唯一の趣味であるファッションに明け暮れていて、
大学をこれでもかというぐらいにサボりつくしていた。

とても暗い雰囲気だったので
友達もあまりできなかったし

僕自身話していて気が合うというか
面白い人もあまりいなかった。

田舎の大学だったのもあり
僕にとってはお洒落な人も皆無で

とことん洋服好きだった僕は
趣味の合う友人ができず、本当につまらなかった。

人との接触がないと、性格はどんどん暗くなっていく。

さらに実家に帰ると、
単位を落としまくっている僕に
怒り狂っている両親がいる。

大学へ入学してから
僕は洋服を買うお金を稼いだかったので
とりあえずアルバイトを始めることとした。

僕が始めたアルバイトは、飲食店のアルバイトだった。
楽しみにしていたのだが
アルバイトも思いのほか、退屈だ。
しかも飲食となると、
理不尽なことでぶち切れられたりする。

髪の毛が入っていたりだとかで
客にぶちぎられる。

社員もその姿を見ては
お前何しでかしたんだという表情で僕を見ってくる。

そもそもの話
そのお客さんの髪の毛かもしれないし
厨房の人間のものかもしれない。

僕にお膳をパスした社員の髪の毛かもしれないし

その席に僕がお膳を持っていったのかすら
もはや危うかった。

なのに僕がブチ切れられるのだ。

僕は大学生ながら
大人っぽくみえたせいなのか
社員とよく間違えられ
他の人のミスでもなぜか僕が
客にぶちぎれられるということもしばしばあった。

当時の僕は、
今考えれば若かったのかもしれないけど
そういう理不尽な世界に耐えるのが
とてもしんどかったし

理不尽なことが非常に嫌いな性格で、
僕のミスでないことはとことん謝りたくないし
(実際は謝ったがw)
それこそが僕の正義だった。

仮にそれが僕の本当のミスなのであれば

僕は土下座をしてでも謝る

僕はそういう人間だ。

飲食のアルバイトをやっていて
理解不能なケチをつけてくるお客さんは
一定数現れるし
ストレス発散に理不尽なことで怒り狂う客もいる。

それに頭を下げる
という全く持って意味不明な世界に、僕はとても辟易した。

そしてその理解不能な世界に
当時の僕は耐えうるができなかった。

これが仕事かと考えると、
お先が真っ暗でもあった。

そんな僕はアルバイトを始めては
億劫になりすぐに辞める
という生活を繰り返していた。

それでも、大好きな洋服だけは
買わないわけにはいかなかったので
クレジットカードや学生ローンで借金をした
お金を使い、洋服を買いあさる
という愚行をしていた。

大学は単位を落とし留年。

理系であったのと
大学はほぼ行かなかったのと
大学での友人がほぼいない僕は
情報源が非常に乏しく、単位を落としまくっていた。
翌年もその状況は変わらず、留年。

両親とは揉めに揉めまくって
僕は家を出ることを決意した。

その3ヶ月ほど前だ。
僕の運命の出会いは。

そう。
初めてのビジネスとの出会いである。

話は少し逸れるが、
今までの23年間の僕の話聞いた人はよくわかるだろう。

僕はとにかく、
生まれてからの23年間、
非常に退屈で、満足のない人生を過ごしてきた。

僕は今までの人生を変えたかった。
とにかく楽しみたかった。
仲間とともに、青春を味わいたかった。

とにかく退屈すぎた小学生時代。

何一つとして満足な結果を残せず
悶々としていた中学時代。

いじめを受け、
勉強にも部活にも恋愛にも
何にも熱中することがなく

ただ時間だけが過ぎ去っていった
空白の高校時代。

大学へ行く意義を感じず
悶々としていた浪人時代。

イメージとは裏腹で退屈すぎた大学。

理不尽なことで叱られまくるアルバイト。

今からでも遅くはない。

今までの退屈な人生に終止符を打って
これからは最高の人生を歩もうじゃないか。

最高の人生にしてやるぜ。
僕はそう意気込んでいた。

そんな時に僕は

同じ大学の知り合いAからふと声がかかる。

A「みさきって何か夢とかあるの？」

僕「う〜ん、、今はとにかくお金稼ぎたいかな。」

A「金稼ぎいいよね！それ俺もなんだよね！！」

僕「おお。なんかいい手段あるかな？笑」

A「1つあるよ。」

僕「なにになに？」

実際にはこんな簡易なやりとりではないが
その知り合いから僕は営業の仕事の誘いを受ける。

その営業会社はベンチャー企業で

社長は当時の僕と同じ年の21歳。

しかも現役大学生というから驚きである。

僕は聞いたことがない異世界に
非常に興奮した。

そしてその1週間後には
その知り合いの言われるがままに
その社長のオフィスへと、直接話を聞きに行った。

社長「夢とかあるんですか？」

僕「ファッションデザイナーです。」

社長「それをやるためにはいくらぐらい資金が必要だとか
いつやる予定で、そこから逆算して考えたりなど、
そういうことって現在行ってはいますか？」

僕「いや、全くですね。」

社長「それならその夢の実現は難しいかもですね。」

その日は社長とたくさんのお話しをした。
話しの雰囲気はこんな感じだが、
話の内容はさておき。

僕はその社長の同い年とは思えない
落ち着きと貫禄、
頭の良さと圧倒的な知識量、
なにより本質思考のその考え方に非常に惹かれた。

今まで、
勉強ができるやつはたくさんみてきた。
けど、こんなにも本質をついていて
圧倒される人間に会うのは、僕の人生で初めてだった。

その社長をHさんとしよう。

僕はHさんの魅力にすっかりやられてしまった。

同い年で大学生で社長か。

鬼頭良すぎるし、本質思考だ。

なにより、、かっこよすぎる。

僕はすぐにその会社で営業をやる決心をする。

実際には、その後すぐに

僕のもとには携帯転売の話が入ってきて

僕はそっちに集中をすることにして

営業の話は一旦辞めにすることとした。

(洋服を買うために学生ローンやクレジットカードで

借金をしまくっていたお金をとにかく返済しなければ

いけなかったなので、即金でお金が入る携帯転売を優先した

のが主な理由)

携帯転売のビジネスは
ある30代後半の男性と一緒にやることとなる。

具体的な内容はここでは割愛するが
それで毎月30万ほどの収益が出ていた。

どちらかというと、
そのパートナーの男性が
その道の筋にとっても詳しく
実際の実務を僕に任せていたといった感じだった。

半年ほど、
その人間と一緒に仕事をする事となる。

僕は少しずつ借金を返しながら、

徐々に普通の生活を取り戻しつつあった。

ある日のこと。

そのパートナーの人間と急に連絡が途絶えた。

その時は特段、あまり意識をしていなかった。

洋服の借金もほぼなくなったし

この先、何をしようか？

そんな感じでこれからのことをのん気に考えていた。

事が発覚したのは

そこから2週間ほどたったある日のことである。

僕の元に4通の手紙が届く。

どれも携帯会社からだ。

そう。

連絡が途絶えた僕のビジネスパートナーは
僕名義でiPhoneなどの携帯の契約をしまくっていた。

一緒に寝泊まりをすることも多かったので
おそらくその時に
勝手に僕の身分証明書などを抜かれていたのだろう。

幸い、身分証明書類は全て
僕の財布の中にあり
盗まれるなどはしていなかった。

その2.3日後にも僕の家到手紙は
来るや来るやで

総額にして70万ほどの金額の
端末が契約されていたことが分かった。

もちろん本体は、
その男が転売してお金に変えたのだろう。

ただそれだけに過ぎなかった。
僕は何人かの人間をその男に紹介をしていた。

本来ならこの話は
紹介した客名義で、
お客さんの了承のもと数台の端末を契約し
転売やキャッシュバックなどを使い
利益に変えて、その一部をお客さんに還元し

その中抜きを僕とそのビジネスパートナーでやるというものだった。

しかし後に発覚したのは
これからこの案件を実施予定だった
僕が紹介した合計6人の人間も
同様の手口で
その男に借金だけ残されては、飛ばれていたのだ。

僕はその男の住所はおろか
氏名さえも
きちんと把握はしていなかった。
(名字で呼んでいたのだ)

僕はビジネスパートナーだったこともあり
紹介を出したお客さんの分も

しっかりと責任を負うこととし

僕には合計500万円ほどの借金が残された。

客も当たり所がないからか

僕にめちやくちやブちぎれてきた。

僕は今にも、精神が病みそうだった。

とりあえず僕は

最早コンビニのアルバイトをし

お客さんに少しずつでも返済していく旨を伝えた。

そして、ここまで話してはいなかったが

僕には学生時代にできた

かなり親しくしていた友人がいた。

僕は彼を親友だと思っていて
携帯転売ビジネス時代も
2週間か1週間に1度は遊ぶというそんな仲だった。

500万円の借金を背負うことになってから。

心の支えがなかった僕は
彼に相談をしていた。

彼にもどうすることもできない。
そうわかっている。

借金発覚後から3週間がたったある日
その親友からも、突然連絡が返ってこなくなる。

何度かLINEを送ってはみたものの
やはり反応がない。

そして、

その彼とは全く無関係の数名の僕の友人達も
彼同様に徐々に連絡がとれなくなっていくのであった。

もともとそんなには多くはないものの、
僕は友人達を全員なくした。

そして、最後に頼れる親でさえ
僕は頼ることができなかった。

家から出てからというもの
僕はあまり両親とは連絡をとっていなかった。

というのも、

両親はとりあえずふらふらしてないで

大学辞めたなら、さっさと就職しろ！

というスタンスで

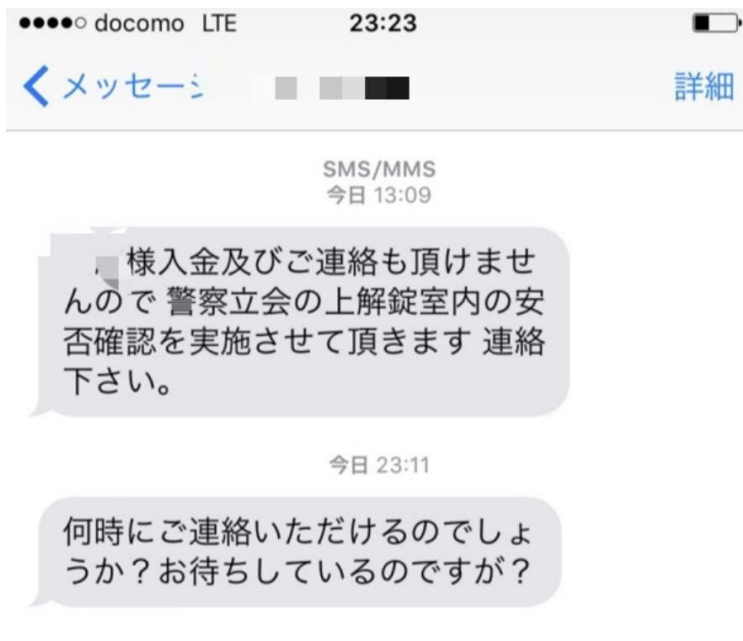
僕もここで連絡をとるわけにはいかなかった。

就職して数年かけて500万円の借金を返していく生活なんて僕には到底考えられなかった。

さらに家賃の支払いもできず

遅れていて、

家には取り立てのような人が毎日来る。



↑ 大〇建〇の管理会社からの当時のショートメール
(家の前でずっと待っていて、
当時はこれにビビりまくっていた)

さらに怒り狂う携帯の客からの連絡。

ついには

家賃の支払いが遅れていることで

実家にも連絡がいき

両親から鬼のような連絡も来た。

相談できる人は誰一人としていない
この状況。

当時23歳。

どうしようもない状況になった僕は
家の中でひたすら泣きわめき、叫んだ。

その7秒後ぐらいには
どうしようもないことを理解し
僕は冷静さを取り戻した。

それと同時に
僕の中でたぐいまれな悔しさのような
感情が一気に溢れ出した。

1年前のあの日

僕は学校を辞め、

両親と大喧嘩し

もはや発狂しすぎて

その時の記憶がほぼないのだが

俺は絶対にうまくいくとか

そんな捨て台詞を吐いて、家を飛び出した。

そんな仲良くはなかったけど

大学を辞めて

これからは自分の力で稼ぐんだ

と周囲の人に決意表明したとき

僕を馬鹿にするような目で見してきた

学生時代の知り合いたちの顔が

走馬灯のように次々と僕の中で思い出された。

と、同時に

僕はとても悔しくなった。

今この状況下にいる自分が

悔しくて悔しくてたまらなくなった。

俺、、、

めちゃくちゃだせえじゃんか。

忘れもしない

2016年2月24日

俺は絶対成功してやる。

そう心に決めた。

まず始めに僕がやろうとしたのは
早々この全くお金がない
家賃も光熱費も支払えてないこの状況から
少しでも早く抜け出すことだった。

携帯転売で借金を負わせてしまった
お客さんは1人毎月3万円の返済をしてくれれば
とりあえずは納得ということで話はまとまった。

しかし
自分の借金を後回しにしたとしても
 $3万円 \times 6人 = 18万$

そして当然だが、

最低限の食費などの消費は必要だ。

そう考えると、少しでも余裕を持たせるには
月収で40万円以上の金額を稼ぐ必要がある。

僕は何を考えたか。

そう。少しお金に余裕を持たせて
以前お願いしたベンチャー企業の社長の元で
営業の仕事をやらせてもらおうと考えていたのだ。

しかしその会社は
フルコミッション制という完全歩合制の営業スタイル。

ゆえにしっかり本気でやるというのなら
営業部は誰でも採用するという会社なのだが

カフェ代などの
いわゆるアポイント代や交通費は自費だ。
なので、少し余裕を持たす必要がある。

僕は必死の覚悟で
1ヶ月間、
コンビニアルバイトで1日20時間働く生活を試みる。

普段は夜勤で毎日入り
朝から夕方にかけては
派遣のコンビニアルバイトというのを登録した。

そして僕の

1ヶ月1日20時間コンビニアルバイト生活が始まる。

家でダラダラしていると

今のこの状況にまた絶望してしまうし

親友と連絡がつかなくなった事実を

思い出して、へこたれてしまうかもしれない。

なので僕にとってこれは

実はあまり大変なことではなかった。

ひたすら、その事実を思い出さぬよう

思考停止するようにして一心不乱に働き続けた。

夜勤には

15分と30分の合計45分の休憩時間がある。

その休憩時間を使い、

コインランドリーで洗濯(及び乾燥)

そしてシャワーを浴びるという毎日。

日中の派遣の休憩時間は

レッドブルなどを飲み

携帯でアラームをつけ、寝ていた。

(1秒で寝れる)

そして1ヶ月の月日がたった。

僕は念願だった月収40万の稼ぎを手にする。

正確な金額は忘れたものの

僕はこの目標値を達成しようと

それだけを常に意識して1か月間働きまくった。

これを達成するまでは絶対に倒れねえぞ

そんなことを考えて。

実はそこからすぐに

営業の仕事を始めれたかという

そうではなかった。

どうしても支払わなければいけないもの

ばかりがたまっていて

僕はその返済に
40万円のほとんどのお金を使ってしまった。

そんな僕はペースこそ落としたものの
コンビニの夜勤のアルバイトと
派遣のアルバイトの掛け持ちの継続をしていた。

2016年6月14日

僕は警察に逮捕される。

次々と短期間で事が起こりすぎて
理解が追い付かない方もいると思う。

実はその2週間ほど前

僕には知り合いから
ある話が来ていた。

それは銀行口座を少しの期間だけ
貸し出すことで、お金がもらえるという話だ。

ちなみにキャッシュカードはいらない。
通帳だけでよいとのこと。

僕は少し怖かった。
ただ、この案件をやれば
僕には30万相当のお金が入るとのことだった。

用途は何に使うか。

その理由を聞いてみた。

”お金持ちの税金の対策”

そっか、それなら大丈夫か。

確かにいいことではないかもしれないけど

それで手段として30万が

今すぐ手に入るなら

そのお金を元手にして

すぐに営業を始めればいい。

そして稼いで成功した暁には

たくさん社会貢献でもすればいいや

と、そのように考えていた。

実際にはその考えはとても甘かった。

僕のその通帳は
振り込め詐欺などの犯罪に使われていたのだった。

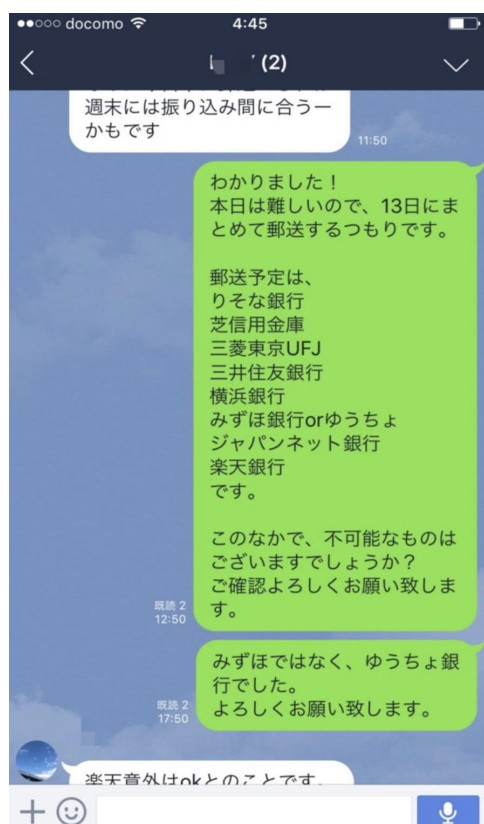
そして僕は逮捕された。

担当してくれた刑事に
僕は理由を正直に
事細かに説明をした。

一応信用をしてはくれていたみたいだが
口座を貸し出すこと
それ自体が犯罪行為らしい。

当時は働き過ぎていて
頭が麻痺していたのか

それ自体がまさか犯罪という事は
当時の僕には全くわからなかった。



↑

(当時の実際のやり取りの写真と逮捕される当日、
早朝からのん気に代官山の蔦屋書店でまったりしているとき
に撮った写真)

最終的には罰金刑で済んだ。

身元引受人が親しかいなかったの
ひさびさ、渋谷警察署で僕は母親と再会をする。

今のこの状況

犯罪という自覚が全くなく
この話に乗ってしまったということ。

全てを正直に
事細かに話をした。

と、同時に
気づいたら涙があふれていた。

23の男が

まるで生まれたばかりの赤ちゃんのように
号泣していた。

恥ずかしいのと

親へのプライドだったり

色々な感情が勝り

へっちゃらだよという強い態度を見せようとする。

しかし涙は止まらない。

僕は取調室の机の下にある

片方の手を

もう片方の手で必死につねった。

しかし涙が一向に収まることはない。

気づけば、周りの刑事の方たちも
涙目になっていた。

そこから2週間後

僕はひさびさに
H社長に連絡をし、今の状況を話し
必死に頑張るという宣言をした後
再び営業を始めることに、同意していただいた。

そして僕は2016年の7月から

本気で営業の仕事をはじめることとなる。

そこからは早かった。

最初の1ヶ月こそ苦戦はしたものの

2ヶ月目からはとんとん拍子で結果を出していった。

2ヶ月目に社内営業成績1位になり

そこからその会社を辞めるまでの

2017年の1月末まで

僕は営業成績トップを走り続けた。

そして営業を始めた半年後の

2017年1月の収入は

月収にして400万円もの金額をたたき出し

その頃には、借金も完済していた。

2017年の2月には独立をし
そこからも正直紆余曲折はあった。

1000万円の詐欺にあった話

法人化して1年後の2018年の5月には
月収にして3000万円の大金を稼いだ話

その8か月後に仲間に裏切られ、
お金が全くなくなる話だとかである。(笑)

あとは僕の人生を一番変えた
インターネットビジネスとの出会いについて

しかし長くなったので

続きはメルマガ内にてお話ししたいと思います。

メールマガジンへの誘導リンクは

最後に貼っておきます。

最後に

多額の借金を背負ったあの日

ヤフオクで大好きだった洋服たちを

必死の思いで全て売ったあの日

光熱費の支払いが遅れ、

真冬に水のシャワーと暗闇の中で過ごしたあの日

気づけば所持金が120円で、晩御飯に困ったあの日

ヤフオクで売れた大好きな洋服の売上金
500円を片手に、松屋が美味しすぎて
大粒の涙を流したあの日

そしてその状況下で
取り立てのような人たちが家に来て

携帯転売のお客さんは怒り狂い
時には脅され

親友並びに友人たちと
全く連絡がつかなくなったあの日を僕は二度と忘れない。

僕の強さの根源はここにある。

そして僕は今、
昔からの夢であったアパレルの仕事の

第一歩を踏み出している。

僕の物語は、まだ始まったばかりだ。

成功の裏の光、そして闇 完.

僕のメルマガは以下から登録できます。

[メルマガ登録はこちら](#)

※メルマガはこの話の物語の続きの配布から始まります。

追伸.

今は特になんかというか、どちらかという両親には

こんな身勝手な息子を育ててくれて

非常に感謝している、

そういう側面の方が大きい

僕は25歳頃まで、
両親に対して半ば恨みのようなそういう感情があった。

両親しか心の支えがないときに、
何度も、僕の気持ちは無様にも一蹴され、
思い届かなかった経験があったからだ。

その時に、少しでも
ほんのちよつとでも
実際の問題の解決に至らなかったとしても

僕に耳を傾けて、聞いてさえいてくれたりすれば
当時の僕はああはならなかったと思う。

それで勉強に身が入り、
難関大学への合格を果たしていたかというと、
それはわからない。

ただ毎年赤点ではなく、
しっかり進級できる点数は取れるよう勉強をしていたと思うし
大学を留年し続けて自主退学をし、
勝手に家を飛び出すなんてこともなかったと思う。

自由なライフスタイルを歩んでいきたい

その思いは結果的に変わらなかったとしても
その途中過程は、もっとうまくやれたのだと、そう思う。

今お子さんがいる親が

これを読んでいるなら、強く言いたい。

子供が何か理由なしに突然

グレることもなければ

急に態度が一変することも無い。

そこには何か必ず、理由があるはずだ。

そこに関してしっかり耳を傾けるという

その子の親にしかできないつとめを

その子の親であるというのなら、しっかりと果たしてほしい。

以上が僕の半生でした。

大変長いこと最後まで読んでいただき、
ありがとうございました。

僕のメルマガは以下から登録できます。

[メルマガ登録はこちら](#)

※メルマガはこの話の物語の続きの配布から始まります。